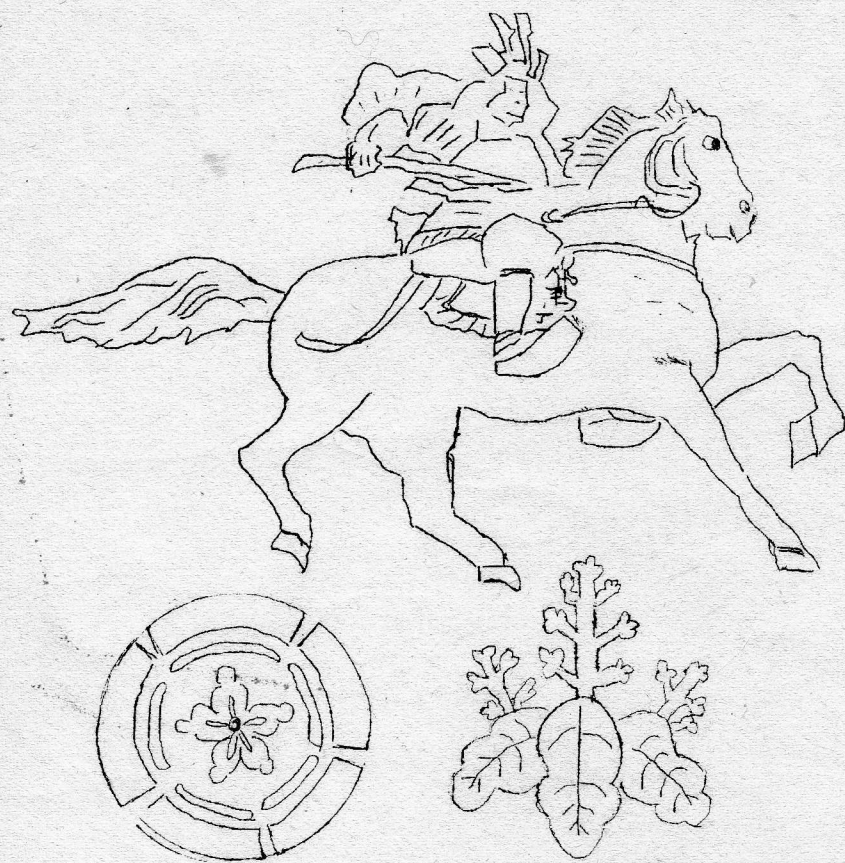


名大郷土研究会

桶狭間の合戦

—— 新入生歓迎行事として ——



前途陽々たる新入生、新らたな決意で再出を誓う。
 上級生、新学期を迎えて学内は活気があふれています。
 このエネルギー、バイタリティーこそ、大学生たる根
 源です。元学生生活において我々はこのエネルギーで何
 かを得ようとして、めまします。そしてその一端を担うべき郷
 土研究会は活かれています。最も素朴な手段で実践的
 体験的に現代人共通の精神的郷土喪失感を打破し、あま
 りよくば新しい心のふるさと”の創造をせんとしていま
 す。このような趣旨の郷研とその部員とを新入生の方に
 理解していただくため、郷研としては三度目の桶狭間
 古戦場、信長進撃コースを徒歩で探究してみようと思
 います。思えば一瞬にして勝敗が決せられたこの戦い
 はその劇的な戦いの経過と歴史にの意義とにおいてま
 ことに興味深い点と歴史の不思議さを含んでいます。
 その興味を倍増すべく又研究のささやかな助力とな
 るべくこの抄を作成しました。
 サークルはエネルギー消費の場であるとともにエネ
 ルギー再生産の場でもあります。自ら積極的に建設的
 に消費すればこそ、新しいエネルギーが湧いてきます。
 エネルギーを出し惜むことなく、大いに歩き、見、聞
 いてそして考え討論しよう。そして新部員を交えた新
 体制のもと、人生へのエネルギー再生産の場として、
 我が郷土研究会を前進させよう。(樋口)

XX

SCHEDULE

凸部会 毎週金曜日4:30 — 学生会館集会室

- 凸4月28日 歓迎踏査会資料配布、学習会
- 凸5月3日 実地踏査会
- 凸5月6日 反省会、合宿(櫻鳴寮2階談話室)
- 凸6月8日 名大祭
- 11日

昭和42年度名古屋大学郷土研究会会員名簿

四年生

法学部 片山勝治 愛知県常滑市久米字荒子47
工学部 津坂峯隆 南区四条町4の4 (691)1966

三年生

経済学部 山岸 章 海部郡甚目寺町西今宿 (服部ろ)
光和利子 (海部局0560)44-4118
リ リ 鈴木克祝 昭和区南分町4の54川口ろ
理学部 樋口清司 四日市市富田一色町12-12

教養部

二年生

L2 14 加藤鉦治 中川区富田町新家142
L2 14 東浦晃徳 昭和区宮東町304の3 大橋ろ
L2 34 諸戸尚視 四日市市富田一丁目8の3
L2 32 西川義永 港区港栄町7-57
L2 33 鈴木政美 四日市市大字茂福1808
S2 15 梶浦博一 四日市市富州原町8-12 (四日市) 65-0547

一年生

L1 11 伊藤明德 春日井市下市場町548
L1 14 西川 洋 一宮市時之島二本松西三
S1 15 井村正博 四日市市東富田町28の30
S1 53 杉浦秀敏 碧海郡高浜町高取小林68
S1 51 塚本政巳 名古屋市北区名城町2の9

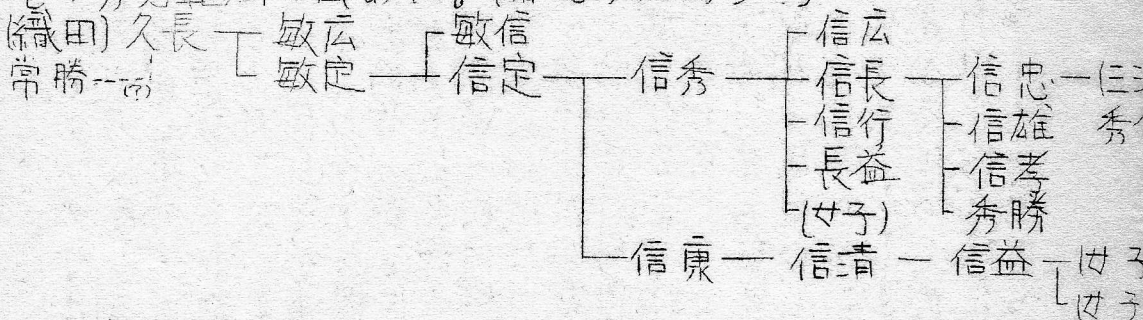
帰省地

山岸：石川県石川郡鶴来町月橋18
東浦：石川県羽咋市押水町宿

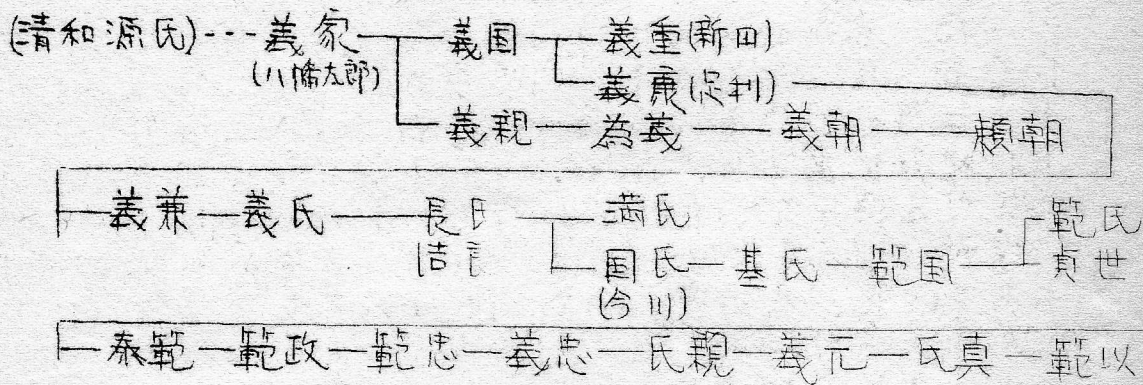


戦田・今川の沿革

織田家は越前には足利幕府の管領斯波家に任えていた。前波家は越前尾張を所領としていた。信長より九代前の時分はじめてその老臣に加わった。しかし曾祖父敏定よりいふと斯波家の勢力が弱まり敏定は尾張の政治を主にするようになった。敏定の孫にあたる信秀(信長父)がその勢力越前を広めた。(諸説多数あり?)



今川家は足利家と血を同じくし義元より十代前吉良国氏
が三河国播磨郡今川荘を領したに始まる。国氏の孫範国の代
が駿河を領する様になり、範国の弟ニ子貞世は遠江の守
護となつた。範国より六代たつて義忠が入京し幕府を護
つた。その際幕府の命令によつて遠江の乱を平定その帰途に
義忠は没した。義忠の孫が義元である。



織田氏の尾張と今川氏の駿河との間には遠江三河の二州がある。この二州の事情が大変両家の間に影響を与えていた。まず遠江は今川仲秋が領していたが彼が早生して後遠江の諸城主は今川家と織田家に属することに必

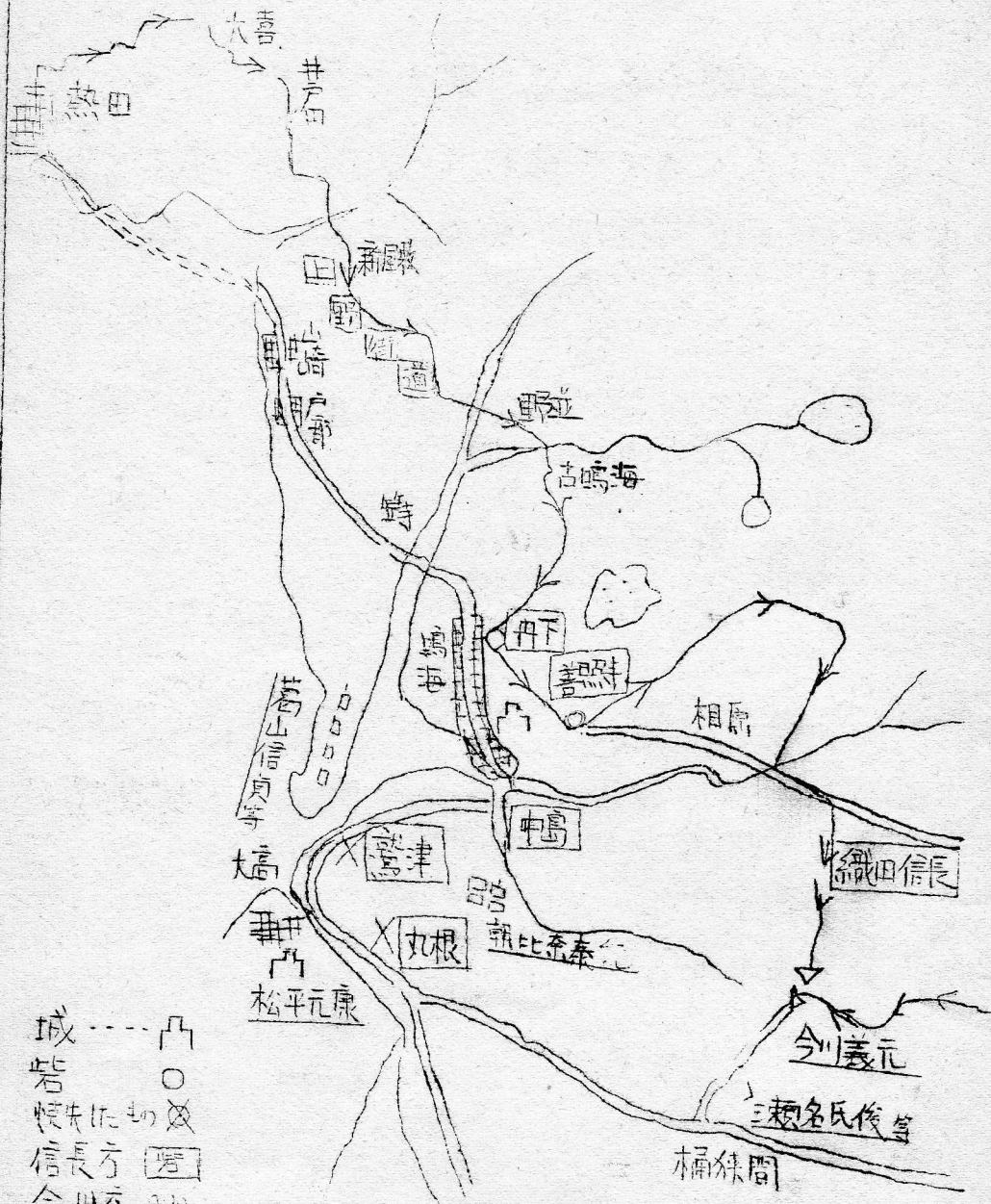
※なつた。しかし氏親(義元)父の時に遠江の織田方の諸
 城は攻撃をうけ今川方となつた。一河三河は最初吉良
 長氏義継兄弟が領していた。この両家は常に主権を争
 つていたが勢威がふるわず三河の諸城主は今川方につ
 こうした。そこで今川方は自分の物としてしまおうと
 したがこれに逆つたのが松平長親(家康五代前)である。
 今川氏親は松平氏を攻めたが支配出来なかつた。つ
 まり尾張と駿河の間に一國が出来たのである。しか
 し年がたち松平広忠(家康の父)の時になり彼が早死に
 したため竹千代が今川に人質となるに及び三河の大半
 も今川に服属することになった。そしてそれと同じ年
 織田信秀が没した。だが松平家と異なり信長がすぐ
 に成人していたので今川には服しなかつた。そうして
 義元がすこしずつ織田家の領土に侵略を始めるによ
 び、いよいよ両家の戦いの時が熟するのである。それ
 はあたかも時永禄三年五月の事であつた。

両軍の兵力

兵数については文献等では一定せぬが知る手段が無い
 わけではない。則ち領土からその兵数を推定するので
 ある。織田家の場合の領土は尾張であるが全部ではな
 かつた。本当の意味の織田領は尾張の半分にも達して
 いなかつた。則ち四十三万石の五割の二とするとな
 十六七万石となる。當時は一石につき二百五十人の
 出兵能力があるとされているから織田家は四千内外
 の兵力を持っていたことになる。しかし兵数の比較
 では戦うべくもなかつた。さうか一方軍紀や訓練がす
 ぐ小つていた。今川家は合計約七十八万石となる。これ
 に尾張の今川領も入れると百万石以上になるだろう。
 そうすると兵数は二万五千人という事になる。だが名
 族の今川家は驕奢に流れてついで柔弱になるきらいがあ
 つたのである。則ち彼今川義元は公卿を真似て額髪を
 剃らず髪を黒く染めていたという事である。

上永凸又 上永凸又 上永凸又

桶狭間合戦参照図



城 ---- 凸
 砦 ---- 〇
 失れた所 〇
 信長方 〔 〇 〕
 今川方 〇

(注) この図は 永禄三年五月十五日
 午後一時前後における状態。
 (西暦 1560 年)

⑥ 戦いの経過

永禄三年(1560)

五月一日：出兵命令を義元は輩下の武将に出す。

十日：先兵出発。

十一日：義元、府中を出発。本軍宿营地

十二日 藤枝
 十三日 掛川
 十四日 引馬(決着)
 十五日 吉田
 十六日 岡崎

(十五日：先兵池鯉鮒に至る。

(十七日：先兵岡崎着。

義元 岡崎、緒川、刈屋の兵の部署決定。

庵原元景ら、堀越義久ら。

十八日：義元、宇願今村を経て首掛着、ここで翌日の
軍隊区分決定。

丸根一松平元康(2500)

鷹津一 朝比奈泰能ら(2000)

援兵一 三浦備後守ら(3000)

清州方面前進兵一 葛山信貞ら(5000)

本軍一 今川 義元(5000)

鳴海城守兵一 岡部元信(7・800か?)

首掛城守兵一 浅井政敏(1500か?)

他に大高城の鶴殿長照にも丸根、鷹津城
攻撃に加わる様指令。

○織田方の守りは

鷹津砦一 織田 信平(400?)

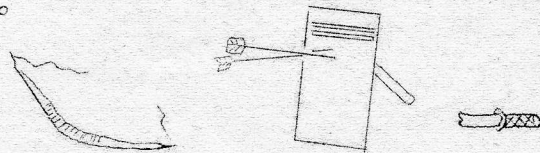
丸根砦一 佐久間 盛重(700 or 400?)

丹下砦一 水野忠水ら(?)

善照寺砦一 佐久間 信辰(?)

中島砦一 梶川一秀ら(?)

なお十八日、信長は佐久間より「義元が十八
日、首掛に着き、十九日丸根、鷹津を攻める」を報
告される。



十九日 *日の出 午前4:27

未明。元康丸根を攻撃⇒信長向盛壘に対して
丸根陥落後義元に報告、休養のため大高
城へ向う。

。朝比奈鷲津を攻撃⇒織田信平らに対して
織田方敗れ一部潰へ敗走(午前十時頃)

午前二時頃か(?) 信長進軍を命令。

空白みはじめる頃 馬で城外へ出る。(岩室重休以下数騎)

午前八時(熱田 200 騎)

。熱田神宮参拝(部下を待つ意であつたらしい)
(兵1200)

。上知我麻祠の前の辺で鷲津丸根の黒煙を見る。
(陥落を知る)

。井戸田

。山崎・佐久向盛重死すの報を受ける。

丹下善照寺の岡で佐々政次、千秋季忠ら(300)
鳴海方面へ向う。

。善照寺・この頃兵(3000)、又ここで政次らの戦
死を聞く。政次らを討った敵を追うとしたが
林・池田・柴田らに諫められた。

。沓掛方面から梁田政綱の使者から報告を受け
る。「義元は大高城へ向かつて桶狭間に休息中」
「義元は田楽狭間に駐屯した。」

政綱の進言を入れて、二千人程度の部下をつれ
丘陵地帯に姿を隠して義元の麾下へ向う。

。ところで一方義元は沓掛から大高へ向う途中
で丸根鷲津の勝利を聞き、さいさき良しとして
田楽狭間に休息していた。

田楽狭間で佐々政次らの首級を見て有頂点と
なる。近くの神官僧侶らが酒肴を持ってきた
ので酒盛りとなり警備ゆるむ。



正午前後

。雨風吹き荒れる。(織田方より今川方へ向かって)

午後二時頃

。やゝ雨足弱まる。織田方は太子ヶ根(大將ヶ根)を駆け下り、真直に敵營をつく。

桑原甚内が義元をみつけるも斬られ、服部小平太が槍で義元の脇腹を刺すも逆に槍柄をそして又膝頭を斬られる。毛利新助が義元をねじふせ左手で頭をおさえたら人差し指をかみ切られた。しかし右手で義元的首を刺した。

午後四時頃

。信長は今川方を追わず、岡米山に兵を集め、義元的首級の実檢をし引きあげる。

もときた道をもどる。熱田神宮により、日が暮れてから清州城へ入った。



関連地解説

(1) 桶狭間古戦場伝説地 (愛知県豊明町大字栄字南館(番外二筆の内))

桶狭間合戦は一瞬にして勝敗が決せられたが、史上の意義は大きい。

16世紀の戦国動乱のなかにあつて駿遠三の三國に強大な勢力をもっていた今川義元は天下を統一しようと永禄3年(1560)5月大軍を率いて京都に向つて進撃を始めた。これを迎え討つ織田信長は同年5月19日小勢をもつて桶狭間で今川の本陣を急襲した。不意をつかれた今川勢は大敗し義元は討死した。その結果織田信長の勢力は急激に拡大し、彼が後に天下を統一する政権を樹立したのもこの合戦の勝利がその跳躍台となつたといえよう。

所で義元敗死の地はたしかは記録もなく古くから諸説がある。合戦には桶狭間の名が冠せられながら古戦場としては豊明町大字栄があげられている。明和8年(1771)にはその地の人々によつて義元の墓碑が建てられ、明治7年山口正義らによつて改めて建碑された。

昭和12年に文部省に申請して「伝説史跡」の指定を受けた。桶狭間では義元敗死の地といわれるのは田楽坪であると主張している。古くからの部長であつて「桶狭間古戦場」「文化13年建(1816)の標石を先年発見した。

ここに今川治郎太輔義元墓(裏面に碑文、明治9年山口正義等)があり、その東方に桶狭間古碑(文化6年 碑文秦鼎)があり五基の小塚がある。(土大井塚という) 田楽坪は一帯小松原で「百坪ばかりの空地が享保ころまで残っていたという。田楽坪はいつしか田楽狭と呼はれるようになり後耕地となり拡張されてヒロソボと呼ばれている。

(2) 戦人塚 (豊明町大字前後仙人塚1737)

大字前後字仙人塚1737高地にある。前後部藩の西端、東海道の北方耕地を隔てて約300米の位置にあり小松の生えた頂上は約5間四方の塚である。その中央に、三尺八寸方七寸の石柱があり、下に里蹟「戦人塚」の石柱及び「注意書」の札がたててある。塚上の石柱は南面戦人塚北面不明東面永禄3年度申5月19日西面南無阿弥陀仏と記されている。この石碑を建てた年月日は不明であるが元文4年この塚で180回忌の伏養を営んだ際に建碑されたものである様に思われる。里伝では永禄3年5月桶狭間の戦に菅原奇二世快翁龍喜和尚ここに戦死者を葬り供養した塚で東軍の死者2500余人という。昭和12年12月21日桶狭間古戦場伝説地と共に文部大臣より史蹟として指定されている。

(3) 今川義元 墓

大字柴字南館にあり往古はやかたはざま(尾形狭間)(館狭間)と叫んでいる。南方がやや南に三面は丘陵起伏の地12坪の方形の築地に石碑がありこれが今川義元の墳墓で戦后130年向ふに塙を残すのみであったが明治10年徳知早令守場保利が有志と謀り大いに修繕を加え一基の碑も建てて今日に至った。碑の正面はくぼんでいて「今川治部大輔義元墓」と刻んである。尾形狭間とは当時義元の称がお館様即ち館(尾形)といわれていたからという。

(4) 松井兵部少輔宗信墓

今川義元の墓より100m程東南の高地にあり三坪程の地に方形の築地をなす。義元の部将であつて義元が戦死し東軍これが為に四散するも松井兵部は井伊直盛等と共に大いに奮闘し遂に元に死し全軍殆んど滅びた。松井は真戦の結果力尽き従者としてこの場に果てた。ここはその死骸を葬った所である。

(5) 五墳

三河七騎の墓と称し戦没した義元の墓より17向余の東にあり今は七坪五合の円形の蟻塚の五箇経路の左側に散在しその五墳と残すのみである。

これは今川義元の幕下でこの役で戦死した者の屍を埋めた所である。余の二墳は詳細でない。或いは七墳というのはこの五墳に義元、松井の二墳を加えての事であるともいう。

(6) 鳴海城跡(根古屋城跡) (鳴海町字城及根古屋)

鳴海町のすぐ北方にある標高20mの丘が鳴海城跡で西に星崎城、南に犬高城と相対し東海道の要所である。応永年中(1394頃)安原宗範が築城し(鳴海神社がここにあったのを今の地に移して)永禄年中今川氏の臣岡部五郎兵衛長教が古城を修理していた。桶狭間合戦に織田信長は義元を破り更に鳴海城を攻め且和をすすめた。長教は和睦の真の考があるばら主、義元の遺骸を返せといったので信長は僧を遣はして返した。長教は駿河に帰り厚く葬った。城郭は東西二郭あり空堀、が堀である。東西135m南北61mばかり南は絶壁にはり東西北三方

に濠の址がある。城址の碑 郭址に建っている。(昭和18年)
善照寺砦址はその丘の東の町、標高25m東方からの防禦陣地である。
東西43m南北28m老松がある。織田信長が今川義元の攻勢に備えて
築いたものと伝えている。

(7) 大高城跡 (大高町字城山)

大高城は永正(1504)の頃花井備中守が居城し天文弘治の頃には
水野忠氏父子が居城した。水野氏は初今川氏に属していたが後織田氏
に属した。所が永禄2年(1559)鳴海城主山口左馬介が織田氏に叛
いてこの城と首掛城とを掠めて今川義元に属した。そこで織田信秀は鷺
津丸根の砦をかまえて兵糧の道をたつたため義元は松平元康に命じて兵
糧を城中に送った。信長は鳴海近傍の砦を巡見して隊伍の整っているのに
懸念して妨げなかった。これが有名な大高兵糧入れである。桶狭間の戦には
元康が守っていたが義元の戦死をきいて三河に帰り廢城となる。元和三年
(1616)志水忠宗が一万石を領して城址に宅を設け明治3年に至り廢した。
大高城跡は標高20m以上の丘にあり東西106m南北32m四方に三重の濠
があった。現在は土居はなく外濠は大体藪として残っている。蓬左文庫蔵大
高村古城絵図に本丸、二の丸、内堀、外堀、土居はとくぬい。本丸中央に大高
城跡碑がある。

(8) 鷺津砦址 (大高町鷺津、大高停車場の東方長寿寺の後の丘)

永禄2年(1559)織田信長が今川氏に対抗する為に丸根砦とともに築い
た。大高丸根、鷺津は三角形の位置にある。桶狭間の戦に陥る。標高35
m南北69m東西40m(堀とも)とあるが境が明でない。

(9) 丸根砦址 (大高町丸根、大高停車場の東南)

鷺津砦の東南400m大高城の東方800m標高35mの地点にある。東西36m
南北28mこの外に巾3.6mの外堀がある。四周に堀の形を残している。
永禄3年(1560)佐々向盛重が守り松平元康の軍を迎え激戦に所。
昭和13年12月14日 史跡指定。



桶狭間の戦いの方向

=X月〇日の新聞より=

義元の戦死地点については、愛知県愛知郡豊明町柴とする説があり、戦前文部省が「史蹟桶狭間古戦場伝説地」という碑を建てた。一方名古屋市緑区有松町桶狭間とする説も有力で、有松町の強い要請で佐々木氏(名大名誉教授)らが昨年秋から調べていた。

委員会は「信長公記」などの史料や郷土史家の研究、民間の伝承を参考に、付近の地形をくわしく調べたが、肝心の今川側の記録がほとんど残っていないこともあって、確証は得られなかった。戦いが合戦というよりも短時間に奇襲戦で済



ったことも記録の少ない中で、さらに豊明有松一帯は似たようななだらかな丘陵地帯であることも調査と困難にしたい

う。しかし豊明町側は明和8年(1771)建立の「今川上総介義元戦死之所」などの古碑が多く、古くから記録に残っている。さらに江戸時代にはこの地に桶狭間村(有松町)の村民が「今川墓参り」に行っていたとあり豊明町説と積極的に否定する材料はなかった。

逆に有松町桶狭間説を積極的に肯定する材料も見つからず、同地に文化13年(1816)に建てた「桶狭間古戦場」の碑も激戦地の中心を示すにとどき直接、義元の碑とは結びつかぬと古戦場調査委は見ている。

本年度役員

部長	樋口清司
副部長	東浦見徳
	諸戸尚視
会計	西川義永
記録	鈴木政美
文集	梶浦博一
コンパ	加藤鉦治

みなさん!!

注



シテチョウダ!



発行：名古屋大学郷土研究会

責任者：樋口清司

編集者：樋口清司

山岸章

(非売品につき市販いたしません)

発行日 昭和42年4月28日(金)

